

Title	極端反応傾向と認知的複雑性との関連
Author	辻本, 英夫
Citation	人文研究. 59 卷, p.33-50.
Issue Date	2008-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	塩出彰教授 : 湯川良三教授 : 細井克彦教授 : 市川美香子教授 : 広瀬千一教授 : 浅岡宣彦教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

極端反応傾向と認知的複雑性との関連

辻 本 英 夫

多段階評定尺度の極端な段階を好んで選択するという反応スタイルである極端反応傾向(ERS)と認知的複雑性との関連について、認知的複雑性に関係する特性と示唆されてきた権威主義傾向をも含めて検討した。ERSと認知的複雑性との間の相関分析の結果、認知的複雑性の1つの指標としてもちいたTPC得点とERS得点の間には一部有意な相関が得られたものの、認知的複雑性のもう1つの指標である第1固有値とERS得点との相関はすべて有意ではなく、本研究では、ERSと認知的複雑性との関連することを支持する証拠は得られなかった。ERSと権威主義傾向の関連については、権威主義傾向の下位特性である「規範重視」との間にほぼ一貫して有意な、しかし予想に反した負の相関が認められた。この点を中心に考察を行った。

問 題

黙従傾向や社会的望ましさと並ぶ代表的な反応スタイルとして、極端反応傾向(Extreme Response Style; 以下、ERS)がある。ERSは、リッカート法に代表される多段階尺度評定において見られる反応スタイルであり、尺度内容とは独立に尺度の両端の段階を好んで選択するという傾向である。従来、ERSは多段階評定尺度による正確な測定を妨害する要因として問題視され、ERS研究の主たる目的の1つとして、その影響の評価・軽減が検討されてきた。しかしながら同時に、ERSが異なる機会・尺度間でかなり安定した傾向であり何らかの個人の内的要因に規定されていると考えられる(Hamilton, 1968; 岩脇, 1973)ことから、ERSを個人の心理的特性を反映する1つの指標として捉え、むしろ積極的に評価・検討されるべきものであるとの主張もなされてきた(Helmstadter, 1957; Jackson & Messic, 1958)。このような主張に基づき、ERSを規定する内的要因を探る試みもこれまで多数なされてきた。しかしながら、年齢(発達水準)、知能、不安、権威主義傾向、曖昧さに対する耐性のなさ、文化規範、異文化適合度などの多種多様な要因がERSとの関連を示唆されており、また、後述するように相反する結果を得ている研究も散見される。現在においても、ERSがどのような要因にどの程度規定されているのかは未だ明確ではなく、今後さらに組織的な検討が必要とされる問題である。

本研究では、ERSを規定する可能性がある要因の1つとして認知的複雑性を取り上げ、ERSとの関連を検討する。ERSが尺度の極端な段階を好んで選択する傾向という点から、1つの

見方として、ERSは白か黒かといった2分法的に物事を単純化してとらえる態度の表れと捉えることができる。そのような態度は、刺激の特徴を細かい点まで弁別的にとらえることが困難であるといった認知的な特徴を反映しており、そのために尺度の中点や中間の段階への反応が少なくなり、極端な段階への反応が多くなるのではないかと考えられる。このような見方に立てば、「環境を多次的に知覚できる能力」(鈴木, 2004)として定義される認知的複雑性とERSの間に負の相関関係が推測される。認知的複雑性の高い人は、認知構造が複数の次元に分化されて構成されているため、それら複数の次元に基づいて事物をより細かく弁別的に評価できるとされている。それに対して認知的複雑性の低い人(認知的単純性の高い人)は、事物を評価する次元が少ないため、認知的複雑性の高い人に比べて、より単純な2分法的な評価をする傾向がある。したがって、認知的に単純な人ほどERSが強いと考えられる。

なお、認知的複雑性という場合、認知構造を構成する次元の数で規定される分化度を指す場合と、それらの次元の階層的関連性の度合いを含めて指す場合とがある(坂元, 1988)。認知的複雑性の測定方法として、多くの研究で採用されている役割構成体領域テスト(Repテスト; 詳細は後述)やその変法による測度は、分化度のみが反映されていると考えられており(Goldstein & Blackman, 1978)、ERSと認知的複雑性との関連について検討を行った研究のほとんどにおいても、認知的複雑性の測度としてはRepテストやその変法に基づくものが使用されている。したがって、本研究においても、認知構造の分化度における個人差として認知的複雑性を考える。

これまでに、認知的複雑性とERSとの関連、認知的複雑性と概念的に類似した統合的複雑性とERSとの関連、また、認知的複雑性・統合的複雑性に関連する諸特性とERSとの関連を調べた研究が、数多く行われてきた。しかしながら、それらの研究では、必ずしも整合した結果が得られているわけではない。過去の研究を概観してみると、少なからず矛盾した結果が見られる。それ故、ERSと認知的複雑性との関連しているのか否かは、現在でも明確に結論づけられない。

経験的にERSと認知的複雑性との関連を検討した研究としては、Deaux & Farris (1975)、Hogan (1977)、Wright & Richardson (1979)、Durand (1979, 1980)がある。Scottの測度をもちいたDurand (1980)以外は、いずれも認知的複雑性を測る尺度としてRepテストをもちいているが、両測度とも得点が高いほど認知的に単純であることを、すなわち認知的単純性を表している。これらの先行研究ではいずれも認知的単純性とERSとの間に関連を見出しているものの、関連の正負に関しては必ずしも一致した結果は得られていない。ERSの測度として、多段階評定尺度の両端の段階(極端反応数)をもちいたDeaux & Farris (1975)とHogan (1977)では正の相関が得られている(認知的に単純な人ほどERSが強い)ものの、ERS測度として個人内分散をもちいたWright & Richardson (1979)、Durand (1979, 1980)では負の相関が得られている(認知的に複雑な人ほどERSが強い)¹⁾。ただし、評定対象であ

る刺激人物ごとにERS得点を算出しているDeaux & Farris (1975) では、認知的単純性と正の相関を示したのは刺激人物がpositiveの場合であり、刺激人物がnegativeの場合には負ないしは有意でない相関を得ている。Wright & Richardson (1979) でも、ERS得点は刺激人物ごとに求められているが、有意な相関が認められたのは10人の刺激人物のうち2人の場合のみにとどまっている。

ERSと認知的複雑性との関連を直接調べた研究ではないが、両者の関連の有無について間接的な示唆を与えてくれる研究もいくつか行われている。White & Harvey (1965)、Frauenfelder (1974) は、認知的複雑性と概念的に類似した統合的複雑性という観点から、認知スタイルとERSとの関連を検討している。Goldstein & Blackman (1978) によれば、「すべての人は情報を分化したり統合したりする能力の程度によって、具体的から抽象的に至る連続体上に順序づけられ」、この連続体が統合的複雑性とよばれる。抽象的な人は具体的な人よりも、事物の認知に際して、より分化し統合された評価が可能であるとされる。White & Harvey (1965)、Frauenfelder (1974) は抽象的な人と具体的な人との間にERSに差が見られるかどうかを検討し、具体的な人（すなわち認知的に単純な人）は抽象的な人（認知的に複雑な人）よりも尺度の両端の段階への反応が多いという結果を得て、統合的複雑性とERSとの負の関連を示唆している。

また、権威主義、独断主義、硬直性、曖昧さへの耐性の欠如といった性格特性は、その性格特徴の1つとして、2分法的に物事を単純化してとらえる態度を有することが指摘されている。その点で、これらの性格特性は認知的複雑性や統合的複雑性に関連した特性と考えられているが（e.g. 鈴木, 2004; White & Harvey, 1965）、これらの特性はまた、ERSとの関連を示唆されている特性でもある。ERSは、権威主義傾向（Mogar, 1960）、硬直性（e.g. Brengelmann, 1959, 1960）、曖昧さへの耐性の欠如（Brengelmann, 1959, 1960; Brim & Hoff, 1957²⁾）と正の相関を示すという報告がなされている。しかしながら、これらの結果と整合しない結果を得ている研究も散見される。ERSと権威主義傾向との関連については、White & Harvey (1965) では有意な相関が得られておらず、Zuckerman, Norton, & Sprague (1958) では、Mogar (1960) とは対照的に負の相関が報告されている。曖昧さへの耐性の欠如についても、辻本 (2000) では有意な相関が示されなかった。

また、ERSと5因子モデルによる性格特性との関連を検討した辻本 (1999, 2003) では、権威主義・硬直性・曖昧さへの耐性の欠如とは対極的な性格特性である（辻, 1998, p. 67）とされる遊戯性とERSとの間に、一貫して正の相関を得ている。辻の主張は必ずしもデータの裏づけに基づくものではないが、辻の主張が正しいとすれば、ERSと遊戯性との間に正の相関関係が認められるという結果は、認知的に単純なほどERSが強いというDeaux & Farris (1975) やWhite & Harvey (1965) らの主張とは整合しないものであると言えよう。

このように、ERSと認知的複雑性との関連については、諸研究の結果に混乱が見られる。

その主たる原因の一つとして、他の目的で構成された尺度がERSの測定に流用されているといった方法論上の問題（Hamilton, 1968; Greenleaf, 1992b; Clarke 2000）が考えられる。実際、上に引用した諸研究においても、辻本（1999, 2000, 2003）以外の研究では、ERSの測定に他の目的で構成された尺度が流用されており、その尺度本来の測定内容がERS得点に多分に影響している可能性がある。たとえば、Deaux & Farris（1975）では、ERS測度である極端反応数の平均値に、評定対象である刺激人物がpositiveの場合では11.97~19.23、negativeの場合では5.30~10.30といった、明らかな差が認められる。彼らの研究では印象評定尺度に基づいてERS得点が算出されているので、刺激人物から受ける印象の強さの違いがERS得点に影響を及ぼして、このような差異を生じさせたとも考えられるのである。したがって、ERSの測定には、ERSの測定自体を目的として構成された尺度を用いることが不可欠であろう。

本研究では、従来の研究におけるこのような問題点を考慮して、ERSを測定するために構成された専用の尺度をもちいた上で、あらためてERSと認知的複雑性との関連の有無を検討する。加えて、認知的単純性をその特徴の1つとすると考えられている権威主義傾向をも検討の対象として取り上げ、権威主義傾向とERSとの間にも、認知的複雑性－ERS間の関係と整合した関連が見られるのかといった点を含めて、ERSと認知的複雑性との関連についてより多角的な検討を試みる。

研究 1

目 的

ERSと認知的複雑性・権威主義傾向との関連を分析する。それに加えて、研究1では、権威主義傾向とは対極的な性質を含む特性と考えられ、かつERSとの関連が比較的安定して見出されている遊戯性についても取り上げて、ERSと遊戯性との関連を確認するとともに、遊戯性と認知的複雑性・権威主義傾向との関連についても調べる。

方 法

調査対象者および手続 調査対象者を大学生とする調査を行った。大阪府下の総合大学の心理学関連科目の受講生に、後述する知覚反応検査（PRT）、役割構成体領域テスト（Repテスト）、権威主義傾向尺度（F尺度）、5因子性格検査 FFPQ改訂版の4種類の評定尺度への回答を求めた。各評定尺度の有効回答数および調査対象者の性別の内訳は、PRT 79名（男性 48名、女性 31名）、Repテスト 78名（男性 45名、女性 33名）、F尺度 79名（男性 47名、女性 32名）、FFPQ 80名（男性 46名、女性 33名、不明1名）であった。

ERS測定尺度・測度 ERSの測定には、ERSの測定を目的として尺度構成された知覚反応検査（Perceptual Reaction Test; PRT; 辻本, 1998）をもちいた。PRTは、ERSへの評定刺

激の影響を避けるために工夫された尺度であり、60個の抽象的記号（シンボル）に対する好悪を、かなり嫌い—やや嫌い—全く中間—やや好き—かなり好きの5段階で評定させるものである。このPRTへの回答に基づき、両端の段階が選択された項目の度数である極端反応数と、中央の段階を選択した場合を0点、その両隣の段階を選択した場合を1点、両端の段階を選択した場合を2点として得点化された項目得点の合計である偏差得点を、ERS測度としてもちいた。辻本（1998）により、両測度間には高い相関があり交換可能であること、また、両測度とも、再検査信頼性、無意味綴りを評定刺激とする語反応検査（WRT）との間の収束的妥当性は、ともに実用的な水準にあることが示されている。

認知的複雑性測定尺度 認知的複雑性の測定には、対人認知領域で広く利用されている役割構成体領域テスト（Role Construct Repertory test; Repテスト; Kelly, 1955）を使用した。ただし、本研究では、認知的複雑性として対人認知における複雑性を想定するのは必ずしも適切ではないと考えられたので³⁾、ERSの測定にもちいた抽象的記号を評定刺激とし、それに対応して評定項目についても、抽象的記号の評定により適切と考えられる項目をもちいた。具体的には次のような評定刺激・項目を使用した。評定刺激には、PRTの60個の刺激の中から、各回答者に好きなもの3個、嫌いなもの3個を選択してもらった。評定項目には、中野（1972）が幾何学図形の評定にもちいた20対の項目のうちから、PRTの評定に使用されている「好きな—嫌いな」と図形の物理的な特徴を表す「まるい—角ばった」「なめらかな—がさがさした」「まとまった—ばらばらな」を除いた16対⁴⁾を選択し、項目の順序や左右の向きをランダムに入れ替えたセットを3種類作成した⁵⁾。回答方法は7件法とした。

このRepテストへの回答に基づいて算出される認知的複雑性の測度としては、各回答者ごとの評定刺激×評定項目データの主成分分析の第1固有値と林（1976）のTPC（Total Person Complexity）を用いた⁶⁾。第1固有値は評定項目間の評定パターン的一致度を、TPCは評定刺激間の評定パターン的一致度をそれぞれ示す。両測度とも、得点が高いほど認知的複雑性が低く、認知的に単純であることを表している。

権威主義傾向尺度 権威主義傾向は Adorno, Frenkel-Brunswik, Levinson, & Sanford（1950）による権威主義尺度（F尺度）の日本語版（西山, 1981）によって測定した。本尺度は、40項目、6件法である。実施に際しては、1）「ですます調」と「である調」が混在しているので、「である調」に統一、2）項目22「占易の理」が大学生には理解しにくいと考えられるので「占いや易」に修正、という軽微な表現上の修正を行った上で実施した。

ただし、西山（1981）では、男女別に本尺度の因子分析（主成分分析・バリマックス回転）を行い、男女とも14因子を抽出しているが、因子分析の代用として主成分分析を用いている、項目数に比べて明らかに因子数が多い、因子が一義的に解釈できないなど、多くの尺度構成上の問題点を有している。そこで本研究では、西山のデータ（男女別の相関行列；各N=300）に基づいて、尺度の再構成を試みた。男女別に主因子法・プロマックス回転で因子分析し、ス

クリープロットや因子の解釈可能性の点から、ともに2因子を抽出した (Appendix)。男女とも、抽出された第1因子は、親や目上の者への尊敬、規律の尊重、国旗掲揚の強制など、伝統的な規範や因襲を尊重する内容の項目に負荷が高く、規範重視とでも解される因子であり、第2因子は、他者への不信、強者による弱者支配という世界観などの項目に負荷が高いことから、人間性不信といった性質の因子であった⁷⁾。この結果に基づき、それぞれ、男女の結果に共通して .3 以上の負荷を示す項目をもちいて、規範重視、人間性不信の2つの下位尺度を構成した。規範重視尺度項目として、項目1、4、6、9、14、15、17、19、24、28、31、36、39の13項目を、人間性不信尺度項目として、項目11、16、18、20、33、35、37の7項目を採用した。この2因子による分散説明率は、男性データで20.2%、女性データで20.4%であった。

FFPQ ERSと遊戯性との関連をあらためて確認するために、5因子性格検査 FFPQ (Five-Factor Personality Questionnaire) 改訂版 (FFPQ研究会, 2002; 5件法、150項目) も同時に実施した。周知のように、本尺度は、5因子モデルに基づく本邦の代表的な性格検査の1つであり、広く国内で使用されている性格検査である。各尺度得点の算出は、標準的な手続きに従った。

結果と考察

まず、2種類の ERS得点、極端反応数と偏差得点の平均値と標準偏差、偏差得点の α 係数、両得点の積率相関係数を Table 1に示す。極端反応数・偏差得点の平均値、両者の相関係数とも、過去の研究結果 (e.g. 辻本, 1998, 2003) とほぼ同程度の値が得られた。同じく過去の研究結果と同様、偏差得点の α 係数も .9 を超える高い値を示した。

Table 1
ERS 得点の基礎統計量 (研究 1)

	極端反応数	偏差得点
平均	11.6	50.2
標準偏差	10.58	20.98
α 係数	—	.95
相関係数	.88**	

$N = 79$. ** $p < .01$.

次に、ERS得点 (極端反応数・偏差得点) と認知的複雑性得点 (第1固有値・TPC得点)、権威主義傾向尺度得点 (規範重視得点・人間性不信得点) の間の積率相関係数を求めた。Table 2はその結果である。Table 2には、本研究データでの各尺度の α 係数および平均・標準偏差も併せて示した。なお、権威主義傾向尺度の2つの下位尺度のうち規範重視については、西山 (1981) データの再分析結果に基づいて13項目で再構成した尺度の α 係数を求めたところ、

調査1では $\alpha=.56$ 、調査2では $\alpha=.68$ とやや低い値であったので、尺度-項目間相関の低い5項目(項目4、6、17、19、28)を削除して、8項目で再々尺度化を行った。

Table 2
ERS 得点・特性尺度得点間の相関(研究1)

	認知的複雑性 ^{a)}		権威主義傾向	
	第1固有値	TPC	規範重視 ^{b)}	人間性不信 ^{c)}
極端反応数	-.13	-.07	-.23*	.05
偏差得点	-.13	.03	-.20	.05
(N)	(63)	(73)	(74)	(74)
規範重視	-.09	.00		
人間性不信	-.01	-.04		
(N)	(62)	(72)		
平均	7.7	81.2	20.0	23.8
標準偏差	1.43	12.56	4.64	5.41
α 係数	—	—	.63	.70
(N)	(67)	(78)	(79)	(79)

a) 6 刺激×16 項目. b) 8 項目. c) 7 項目. * $p < .05$.

認知的複雑性とERSとの間では、どの測度間にも有意な相関が認められなかった。また、第1固有値とTPC得点間の相関も有意ではなかった($r=.05$, *n.s.*, $N=66^{83}$)。対照的に、権威主義傾向とERSとの間には、規範重視と極端反応数間に有意な相関が得られた($r=-.23$, $p<.05$)。権威主義傾向尺度の人間性不信については、極端反応数・偏差得点のいずれにおいても、相関係数の値はほぼ0であった。なお、認知的複雑性の第1固有値・TPC得点と権威主義傾向尺度の規範重視得点・人間性不信得点の間にも、有意な相関は認められなかった。

以上のように、ここでのERSと認知的複雑性および権威主義傾向の関連分析の結果では、わずかに権威主義傾向尺度の規範重視と極端反応数間に有意な相関が見られただけであり、ERSと認知的複雑性、ERSと権威主義傾向のいずれについても、明確な関連は認められなかった。

さらに、極端反応数・偏差得点とFFPQ尺度得点の間の積率相関係数を求めたところ(Table 3)、辻本(1999, 2003)と同じく、FFPQの遊戯性との間に、極端反応数・偏差得点とも有意な正の相関が得られた($r=.29$, $.34$, $p<.01$)。FFPQの下位尺度に関しても、辻本(1999, 2003)と同じく、内的敏感と奔放において、極端反応数・偏差得点の両ERS測度で有意な正の相関が示された。ただ、FFPQの下位尺度、特に奔放は、極端に α 係数の値が低く、どこまで信頼しうる結果と言えるかは不明である。

Table 3 ERS 得点と FFPQ 尺度得点との相関 (研究 1)

	FFPQ 尺度				
	外向性	愛着性	統制性	情動性	遊戯性
極端反応数	.12	-.05	-.17	.11	.29*
偏差得点	.16	.04	-.12	.14	.34**
平均	88.8	97.1	90.7	101.3	109.4
標準偏差	15.61	15.48	14.02	15.79	11.46
α 係数	.87	.89	.86	.88	.78

	遊戯性下位尺度				
	進取	空想	芸術への 関心	内的敏感	奔放
極端反応数	.08	.27*	.03	.25*	.31**
偏差得点	.08	.23	.16	.36**	.28*
平均	21.5	22.1	21.2	23.0	21.7
標準偏差	3.39	3.44	4.57	3.29	3.13
α 係数	.58	.60	.74	.64	.28

a) 30 項目. b) 6 項目. $N = 74$ (相関係数), $N = 80$ (基礎統計量).* $p < .05$. ** $p < .01$.

なお、認知的複雑性尺度および権威主義傾向尺度得点と FFPQ 尺度得点の間の相関分析も行ったが、有意な相関が得られたのは、権威主義傾向尺度の人間性不信尺度と外向性 ($r = -.29$, $p < .05$, $N = 74$) と、同じく人間性不信尺度と愛着性 ($r = -.44$, $p < .01$, $N = 74$) のみであった。内向的で非協調的であるほど人間性に対する不信が高いと解されるこの結果は、権威主義傾向尺度の第 2 因子を「人間性不信」と解釈することが適切であることを示している。ただ、認知的複雑性尺度 (第 1 固有値・TPC 得点) と遊戯性との間では有意な相関が得られず、ここでの結果では、認知的複雑性と遊戯性とが必ずしも対極的な性質をもつことは示されなかった。

研究 2

目的

研究 1 の追試を行い、研究 1 の結果が安定して見出されるのかを確認する。

方法

調査対象者および手続 研究 2 では、研究 1 と異なる大阪府下の総合大学の心理学関連科目の受講生を対象に、PRT、Rep テスト、F 尺度を実施した。有効回答数および性別の内訳は、PRT 81 名 (男性 20 名、女性 60 名、不明 1 名)、Rep テスト 74 名 (男性 21 名、女性 53 名)、F 尺度 80 名 (男性 22 名、女性 57 名、不明 1 名) であった。なお、各尺度得点間の相関分析では、相関をとる変数の組み合わせによって有効回答数が異なるため、有効回答数はその都度明記する。

測定尺度 ERS、認知的複雑性、および権威主義傾向の測定には、研究1と同じ尺度・測定をもちいた。

結果と考察

2種類のERS得点（極端反応数・偏差得点）の平均値と標準偏差、偏差得点の α 係数、両得点の積率相関係数をTable 4に示す。極端反応数・偏差得点の平均値が研究1よりもやや高い値であったものの、どの統計量についても研究1とほぼ同程度の値が得られた。

Table 4
ERS 得点の基礎統計量 (研究 2)

	極端反応数	偏差得点
平均	13.6	58.3
標準偏差	10.71	20.24
α 係数	—	.95
相関係数	.86**	

$N = 81$. ** $p < .01$.

Table 5は、ERS得点（極端反応数・偏差得点）と認知的複雑性得点（第1固有値・TPC得点）、権威主義傾向尺度得点（規範重視得点・人間性不信得点）の間の積率相関係数を示したものである。

Table 5
ERS 得点・特性尺度得点間の相関 (研究 2)

	認知的複雑性 ^{a)}		権威主義傾向	
	第1固有値	TPC	規範重視 ^{b)}	人間性不信 ^{c)}
極端反応数	-.10	.17	-.31**	-.01
偏差得点	-.07	.30*	-.34**	-.02
(<i>N</i>)	(62)	(70)	(73)	(73)
規範重視	-.04	-.04		
人間性不信	-.09	.19		
(<i>N</i>)	(63)	(69)		
平均	8.1	90.0	20.1	22.5
標準偏差	1.51	19.16	5.25	5.81
α 係数	—	—	.75	.79
(<i>N</i>)	(67)	(74)	(80)	(80)

a) 6 刺激 × 16 項目. b) 8 項目. c) 7 項目. * $p < .05$. ** $p < .01$.

ERSと認知的複雑性との間では、偏差得点-TPC得点間で有意な相関 ($r=.30, p<.05$) が得られたが、極端反応数-第1固有値間、極端反応数-TPC得点間、偏差得点-第1固有値間の相関はいずれも有意ではなかった。また、第1固有値とTPC得点間の相関も有意ではなかった ($r=.01, n.s., N=66^{\text{§}}$)。対照的に、権威主義傾向尺度の規範重視と両ERS得点との間には、有意な相関が得られた (極端反応数 $r=-.31, p<.01$ 、偏差得点 $r=-.34, p<.01$)。権威主義傾向尺度の人間性不信との関連については、極端反応数・偏差得点のどちらにおいても、研究1同様、無相関といってよい結果であった。第1固有値・TPC得点と権威主義傾向尺度得点の間にも、有意な相関は認められなかった。

研究1と2を通じて、一部の測度間で有意な相関が認められたものの、ERSと認知的複雑性との関連を強く示唆するような結果は得られなかった。他方、ERSと権威主義傾向の関連に関しては、ERSと規範重視との間に、研究1と2を通じてほぼ一貫して、有意な相関が認められた。しかしながら、有意な相関が得られたとはいえ、それは予想とは逆の負の相関であった。辻本(2006)では、独自性欲求尺度の下位特性である自由奔放がERSと正の相関を示すことが見出され、自由奔放の特徴である規範にとらわれない自由な態度表明が明確な態度表明である極端な段階への反応につながるのではないかと考察されている。規範にとらわれないか規範を重視するかという点で、自由奔放と規範重視の両特性は概念的に関連した特性とも考えられるので、ここで示唆されたERSと規範重視との負の関連についても、辻本(2006)と同様な解釈が可能かもしれない。

研究 3

目 的

研究1・2では、ERSと認知的複雑性との明確な関連を示すような結果は得られなかった。ERSと権威主義傾向との関連については、権威主義傾向の下位特性である規範重視とERSの関連を示唆する結果が得られたものの、予想された関連とは逆の関連であった。研究3ではさらに追加調査を行い、同様な結果が安定して得られるかどうかを検討する。また、独自性欲求尺度の下位特性である自由奔放という特性を取り上げて、ERSと規範重視との負の関連について、前述した「規範にとらわれない自由な態度表明が明確な態度評定である極端な段階への反応につながる」という解釈が成り立つのかどうかを検討する。

方 法

調査対象および手続 研究1・2と同様、調査対象者は大阪府下の総合大学の大学生である。研究1・2とは異なる心理学関連科目の授業時間内に、PRT、Repテスト、F尺度、ならびに自由奔放尺度を実施した。有効回答数は、PRT263名(男子139名、女子120名、不明4名)、Repテスト247名(男子127名、女子116名、不明4名)、F尺度 275名(男子146名、女子125名、

不明4名)、自由奔放尺度276名(男子148名、女子124名、不明4名)であった。各尺度得点間の相関分析の有効回答数はその都度明記する。

測定尺度 研究1・2と同様、ERSの測定にはPRT、ERS測度には極端反応数と偏差得点を持ちいた。また、Repテストについても研究1・2と同じものを持ちいた。F尺度については、研究1・2の結果からERS得点と有意な相関が得られた規範重視尺度のみを持ちいた。さらに研究3では、辻本(2006)でERS得点との有意な相関を示した自由奔放尺度を含めた。この自由奔放尺度は、辻本(2006)が岡本(1991)の尺度に項目の追加・削除を行って再構成した独自性欲求尺度の下位尺度の1つである。12項目5件法の尺度であり、 α 係数は.74(辻本, 2006, 研究2)と、内的整合性は一定の水準を満たしている。

結果と考察

極端反応数・偏差得点の基礎統計量は研究1・2とほぼ同程度の値が得られた(Table 6)。両測度の積率相関係数や偏差得点の α 係数も、.9を超える高い値であった。

Table 6
ERS 得点の基礎統計量 (研究 3)

	極端反応数	偏差得点
平均	12.7	52.3
標準偏差	9.59	17.37
α 係数	—	.92
相関係数	.91**	

$N = 263.$ ** $p < .01.$

Table 7に示したのは、ERS得点と、認知的複雑性(第1固有値・TPC)得点、規範重視および自由奔放尺度得点との間の積率相関を求めた結果である。認知的複雑性については、第1固有値とERS得点間には有意な相関が得られなかったのに対して、TPC得点は、極端反応数、偏差得点のいずれとも有意な正の相関を示し($r=.14, p<.05$; $r=.20, p<.01$)、研究1・2とはやや異なる結果となった。なお、第1固有値とTPC得点間の相関は $r=.17 (p<.05, N=198^{(3)})$ であった。

規範重視尺度に関しては、研究2同様、極端反応数、偏差得点のいずれとも有意な負の相関を示した($r=-.17, r=-.23, p<.01$)。規範重視はまた、自由奔放との間に低いが有意な負の相関($r=-.16, p<.01, N=273$)を示しており、自由奔放であるほど因襲を尊重しない傾向にあることがうかがえる。認知的複雑性や規範重視とは対照的に、ERSと自由奔放の間の相関はほぼ0であった。これは辻本(2006)とは異なる結果である。また、認知的複雑性と規範重視、認知的複雑性と自由奔放の間には、有意な相関は認められなかった。研究1~3を通して規範重視-ERS間にほぼ一貫して有意な相関係数が示されたことから、両者の間に関連のあるこ

Table 7 ERS 得点・特性尺度得点間の相関 (研究 3)

	認知的複雑性 ^{a)}		規範重視 ^{b)}	自由奔放 ^{c)}
	第1固有値	TPC		
極端反応数	.00	.14*	-.17**	.04
偏差得点	.02	.20**	-.23**	.03
(N)	(186)	(235)	(261)	(261)
規範重視	-.03	-.04		
(N)	(196)	(244)		
自由奔放	-.07	-.04	-.16**	
(N)	(196)	(245)	(273)	
平均	7.7	79.8	19.5	34.3
標準偏差	1.58	16.15	4.48	6.09
α 係数	—	—	.57	.64
(N)	(198)	(247)	(275)	(276)

a) 6 刺激× 16 項目. b) 8 項目. c) 12 項目.

* $p < .05$. ** $p < .01$.

とが強く示唆される。ただし、規範重視は、自由奔放と共に、今回のデータでは α 係数がやや低く、その点に問題を残す結果となった。

総合的考察

本研究の主目的である ERS と認知的複雑性との関連については、第 1 固有値を測度とした場合には、研究 1～3 を通じて、まったく有意な相関は得られなかったのに対し、TPC 得点を測度とした場合には、研究 1～3 の合わせて 3 つのデータセット×2 種類の ERS 測度の 6 ケースのうち、半数の 3 ケースで有意な相関が認められた。このように、認知的複雑性の測度としてもちいた第 1 固有値と TPC 得点とは異なる結果となった。さらに、第 1 固有値と TPC 得点間の相関は、研究 1・2 では有意ではなく、研究 3 においても有意とはいえ相関係数の値は .17 と低い値に留まった。これらの結果から判断して、両測度の測定内容が異なることが示唆され、少なくとも一方の測度は認知的複雑性を正確に反映していない可能性が考えられる。この点について第 1 固有値と TPC とを比較検討すると、理論的には、評定刺激間の一致度の

指標であるTPCよりも、評定項目間の一致度の指標である第1固有値の方が、認知構造を構成する次元の数で規定される分化度の度合を直接反映する指標であるといえる。また経験的にも、認知的複雑性の指標として最も良くもちいられるTCC (Total Cognitive Complexity) (注6参照) との相関が、第1固有値では.8という高い相関がある(坂元, 1993, 表1-2)のに対して、TCCとTPCの相関は.6程度にとどまっている(林, 1976)。これらの点を考慮すれば、第1固有値での結果を重視すべきであり、したがって本研究の結論としては、ERSと認知的複雑性との関連を示唆する結果は得られなかったとするのが妥当と言えよう。

他方、ERSと権威主義傾向との関連については、規範重視との間で3つのデータセットを通して、ほぼ一貫して有意な負の相関が認められた。相関係数の値は低いとはいえ、安定して有意な相関関係が得られたことから判断して、ERSと規範重視には関連があると考えてよいであろう。しかしながら、ERSと規範重視との相関は負の相関であり、権威主義傾向が強い人は認知的に単純であるからERSが強いという当初の予想とは逆に、規範重視得点の低い人、すなわち伝統的な規範や因襲に頓着しない人ほどERSが強いという結果である。この結果は、むしろ、辻本(2003, 2006)で示唆された、遊戯性が高い人は伝統・常識・規範にとらわれずに自由に態度を表明できるが故に明確な態度表明としての極端反応が多いという解釈に沿った結果であると考えられる。実際、本研究においてもERSと遊戯性の間には有意な正の相関が得られたこと、また、規範重視と自由奔放の間に有意な負の相関が得られたことは、この解釈と整合した結果と言えよう。ただ、規範重視と自由奔放の間の相関の値は低いこと、遊戯性と規範重視の間の相関はほぼ無相関であること、規範重視尺度と自由奔放尺度の α 係数がやや低く、妥当性の検討も不十分であることから、このような解釈が適切であるか否かは、今後さらに検討を加えていく必要がある。加えて、ERSと自由奔放の関連については、辻本(2006)の結果と異なり、本研究では、両者の間には有意な相関が認められなかった。このように結果が異なった理由は明らかではなく、この点についても今後の検討が必要である。ただ、本研究と辻本(2006)では、もちいた尺度や回答者の属性といった点で特に異なる点はないので、標本変動の可能性も考えられる。

本研究を含め、これまでにERSと各種の特性との間で報告されてきた相関関係は、有意であるとはいえ、多くの場合必ずしも相関係数の値は必ずしも高い値ではない。そのことから、ERSは様々な特性によって規定されている可能性があり、かつ、ERSとそれら個々の特性との関連はあまり強くないことが推測される。一般に母相関係数の値が低いほど、標本相関係数の標準誤差は大きくなるから、ERSと諸関連特性との標本相関係数の場合も標準誤差は相対的に大きく、それ故、標本変動の影響を受けやすく、個々の研究結果にばらつきが生じやすいと考えられる。従って、単一の研究結果から判断するのではなく、データを積み重ねて、相関係数の値が低くても一貫して安定した関連が見られるかどうかという点が重要であろう。

結果の安定性を重視するという観点から言えば、これまでにくり返して見出されてきたER

Sと遊戯性・開放性との関連が最も注目される。本研究においても、研究1において、ERSと遊戯性の間に有意な正の相関が得られ、ERSと遊戯性の関連をあらためて裏づける結果となった。また、ERSと規範重視との間に見られた負の相関関係も、ERSと遊戯性との関連と関係づけて解釈することが可能であると考えられる。しかしながら同時に、自由奔放については、ERSとの有意な相関が示されなかった。この点も含めて、今後の研究の方向性の1つとして、ERSと遊戯性・開放性の関係を更に詳しく検討していくことが重要であろう。

ERSと認知的複雑性との関連に関しては、本研究では必ずしも十分に検討できたとは言えず、いくつかの問題点を残すことになった。最後に、残された主要な問題点を今後の課題としてまとめておきたい。まず、認知的複雑性という特性自体が、対人認知の分野で提唱され検討を進められてきた概念であり、対人認知以外の認知領域全体に適用可能な概念であるのかどうかについては、ほとんど研究が行われていないという点が挙げられる。この点から派生する具体的な方法論上の課題として、Repテストに用いる刺激や評定項目として、どのようなものがより適切であるのかを検討しなければならない。その上で、認知的複雑性という特性が、個々の認知領域に独立なものなのか相互に関連したものなのかを明らかにする必要がある。

次に、認知的複雑性の指標についても、多くの課題が残されている。本研究では、認知的複雑性を認知構造の分化度の点のみから捉えているので、認知構造を構成する次元の階層的関連性の度合い（いわゆる統合性）の点から認知的複雑性を規定した場合にも、同様な結果が得られるか否かは今後の課題の1つである。また、分化度に基づく指標に関しては、本研究では、従来用いられてきた指標の1つであるTPCについては、認知的複雑性の指標としての適切性が疑問視されるような結果となった。では、TPCが認知的複雑性を反映していないとすれば何を反映しているのであろうか、この点も、本研究で残された課題の1つである。以上の諸点を克服した上で、さらにERSと認知的複雑性の関連の検討を進めていくことも、今後のERS研究の重要な課題であろう。

【付記】

本研究の研究1の一部については、日本パーソナリティ心理学会第14回大会（2005年）において発表した。

【注】

- 1) Durand (1979, 1980) は、ERSが高いほど個人内分散は低いと考え、個人内分散と認知的単純性得点の間に負の相関が認められたことは、極端反応数と認知的単純性得点の間に正の相関を得たDeaux & Farris (1975) や Hogan (1977) と一致した結果であるとしている。しかしながら、個人内分散と極端反応数は通常高い正の相関を示す (Greenleaf, 1992a) ので、個人内分散と認知的単純性得点の間の負の相関は、認知的に複雑なほどERSが高いことを示唆すると考えるべきである。
- 2) Brim & Hoff (1957) は、曖昧さへの耐性の欠如は確実性への欲求の強さの現れであるという見解に基づき、ERSと確実性への欲求との間の関連を検討し、有意な相関を得ている。
- 3) 認知的複雑性の一般性に関しては、あらゆる認知領域に共通する一般的な傾向であるという意見もあるが、坂元 (1993) が指摘するように、どの程度まで一般化しうるのは現状では明確ではなく、

- Repテストの測定結果は評定刺激の違いによって異なってくる可能性がある。
- 4) 「静かなーさわがしい」「陽気なー陰気な」「はでなー地味な」「緊張したーゆるんだ」「重いー軽い」「美しいーみにくい」「健康なー不健康な」「面白いーつまらない」「安定したー不安定な」「男らしいー女らしい」「動的なー静的な」「理知的なー感情的な」「鋭いー鈍い」「強いー弱い」「固いー柔らかい」「暖かいー冷たい」の16対を採用した。
 - 5) 抽象的な記号の印象評定でありより微妙な判断が要求されると思われることから、先行する項目への反応に引きずられるという順序効果が危惧されたため、その影響を極力避けるために3種類のセットを用意した。
 - 6) Repテストに基づく認知的複雑性の測度としては、一般に、評定項目間の評定パターンの一致度を示すTCC (Total Cognitive Complexity) がもちいられることが多い。評定項目としてもちいられる形容詞対の左右の向きは、肯定的評価ー否定的評価という基準によって揃えられる。しかしながら、本研究で Repテストにもちいた形容詞対には、どちらが肯定的とも否定的とも言えないものが含まれており、評定項目の左右の向きを一意に決定することは困難であった。そのため、認知的複雑性の測度としてTCCをもちいることにはやや問題があると考え、形容詞対の左右の向きに依存しない第1固有値とTPCを採用した。なお、第1固有値とTCCの間には高い相関が見られること(坂元, 1993)、また、TPCとTCCについても正の相関関係にあることが知られている(林, 1976)。
 - 7) 男女別に得られた対応する因子間で Tuckerの因子一致係数(Φ係数)を求めたところ、第1因子でΦ=.94、第2因子でΦ=.89という高い値が得られた。
 - 8) 変数(評定項目)の分散が1である回答者については固有値が求まらないため、分析から除外した。

【引用文献】

- Adorno, T. W., Frenkel-Brunswick, E., Levinson, D. J., & Sanford, R. N. 1950 *The authoritarian personality*. New York : Harper & Brothers. (田中義久・矢沢次郎・小林修一訳 1980『権威主義的パーソナリティ』青木書店)
- Bregelmann, J. C. 1959 Differences in questionnaire responses between English and German nationals. *Acta Psychologica*, 16, 339-355.
- Bregelmann, J. C. 1960 Extreme response set, drive level, and abnormality in questionnaire rigidity. *Journal of Mental Science*, 106, 171-186.
- Brim, O. G., Jr., & Hoff, D. B. 1957 Individual and situational differences in desire for certainty. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 54, 225-229.
- Clarke, I. III 2000 Extreme response style in cross-cultural research: An empirical investigation. *Journal of Social Behavior and Personality*, 15, 137-152.
- Deaux, K., & Farris, E. 1975 Complexity, extremity, and affect in male and female judgments. *Journal of Personality*, 43, 379-389.
- Durand, R. M. 1979 Cognitive complexity, attitudinal affect, and dispersion in affect ratings for products. *The Journal of Social Psychology*, 107, 209-212.
- Durand, R. M. 1980 The effect of cognitive complexity on affect ratings of retail stores. *The Journal of Social Psychology*, 110, 141-142.
- FFPQ 研究会(編) 2002『改訂 FFPQ (5 因子性格検査) マニュアル』北大路書房
- Frauenfelder, K. J. 1974 Integrative complexity and extreme responses. *Psychological Reports*, 34, 770.
- Goldstein, K. M., & Blackman, S. 1978 *Cognitive style: Five approach and relevant research*. New York: Wiley. (ゴールドシュタイン K. M.・ブラックマン S. 島津一夫・水口禮治訳 1982『認知スタイル』誠信書房)
- Greenleaf, E. A. 1992a Improving rating scale measures by detecting and correcting bias components in some response styles. *Journal of Marketing Research*, 29, 176-188.
- Greenleaf, E. A. 1992b Measuring extreme response style. *Public Opinion Quarterly*, 56, 328-351.

- Hamilton, D. L. 1968 Personality attributes associated with extreme response style. *Psychological Bulletin*, 69, 192-203.
- 林 文俊 1976「対人認知構造における個人差の測定(1) -認知的複雑性の測度についての予備的検討-」『名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科)』, 23, 27-38.
- Helmstadter, G. C. 1957 Procedure for obtaining separate set and content components of a test score. *Psychometrika*, 22, 381-393.
- Hogan, H. W. 1977 Complexity, extremity, affect, and threat as dimensions of person perception. *Journal of Psychology*, 96, 321-325.
- 岩崎三良 1973『心理検査における反応の心理』日本文化科学社 Pp. 197-216.
- Jackson, D. N., & Messick, S. 1958 Content and style in personality assessment. *Psychological Bulletin*, 55, 243-252.
- Kelly, G. A. 1955 *The psychology of personal constructs*. New York: Norton.
- Mogar, R. E. 1960 Three versions of the F scale and performance on the semantic differential. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 60, 262-265.
- 中野光子 1972「色彩感情と形態感情の合成効果に関する分析的研究」『心理学研究』, 43, 22-30.
- 西山俊彦 1981「カリフォルニア権威主義尺度の包括的検討」『サビエンチア(英知大学紀要)』, 15, 1-25.
- 岡本浩一 1991『ユニークさの社会心理学』川島書店
- 坂元 章 1988「認知的複雑性と社会的適応 -分化性と統合性による認知システムの類型化の試み-」『心理学評論』, 31, 480-507.
- 坂元 章 1993『認知的複雑性と社会的知覚システムの進展』風間書房
- 鈴木佳苗 2004『認知的複雑性の発達社会心理学 - 児童期から青年期における対人情報処理システムの変化』風間書房
- 辻平治郎(編) 1998『5因子性格検査の理論と実際 -こころをはかる5つのものさし-』北大路書房
- 辻本英夫 1998「極端反応傾向測定尺度 WRT・PRT 日本語版の信頼性・妥当性の検討」『性格心理学研究』, 7, 33-41.
- 辻本英夫 1999「極端反応傾向と5因子モデルによる性格特性との関連」『人文研究(大阪市立大学文学部紀要)』, 51(10), 79-90.
- 辻本英夫 2000「不安水準および曖昧さに対する耐性の欠如と極端反応傾向との関連」『人文研究(大阪市立大学文学部紀要)』, 52(6), 71-81.
- 辻本英夫 2003「極端反応傾向と開放性・遊戯性・外向性」『パーソナリティ研究』, 12, 14-26.
- 辻本英夫 2006「極端反応傾向と個人主義関連特性との関連」『パーソナリティ研究』, 14, 293-304.
- White, B. J., & Harvey, O. J. 1965 Effects of personality and own stand on judgement and production of statements about a central issue. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1, 334-347.
- Wright, R. J., & Richardson, L. 1977 The effect of response style on cognitive complexity and course evaluation. *Educational and Psychological Measurement*, 37, 177-183.
- Zuckerman, M., Norton, J., & Sprague, D. S. 1958 Acquiescence and extreme sets and their role in tests of authoritarianism and parental attitudes. *Psychiatric Research Reports*, 10, 28-45.

【2007年8月31日受付, 9月28日受理】

Relationships between extreme response style and cognitive complexity

TSUJIMOTO Hideo

Abstract: Extreme response style (ERS) is the tendency to use frequently extreme alternatives of a rating scale for any specific item content. In the present study, we explored relationships between ERS and cognitive complexity as well as authoritarianism (a trait associated with cognitive complexity). There were some significant correlations between ERS scores and TPC scores (one of the indices of cognitive complexity), but none of the correlations between ERS scores and the first eigenvalues (the other complexity index) was significant. ERS almost consistently correlated with "emphasis on traditional norms" (a sub-trait of authoritarianism), though, opposite to what was expected, the correlations were negative. No support was found for the relations between ERS and cognitive complexity. Implications of these results were discussed.

Appendix 権威主義尺度の因子パターン行列

	項 目	因子 (男性)		因子 (女性)	
		1	2	1	2
1	親や先生の言うことをよく聞き、尊敬するということは、子供の学ぶべきもっとも大切なことである	.64	-.32	.67	-.38
2	人生の成功や失敗はすべて本人の意志によってきまるものだから、どんな弱点や困難もその人の意志さえ強ければ問題にならない	.38	-.02	.21	-.04
3	科学や学問は尊重されなくてはならないが、しかし人間の知性では決して知ることのできないことで、たいせつなことがたくさんある	.19	-.10	.19	-.02
4	人から受けた恩は返すのがあたりまえである	.40	-.09	.44	-.04
5	人間の本性から考えて、戦争や争いごとは決してなくなるならいだろう	-.08	.20	-.09	.24
6	若い人はとかく反抗的な考え方をもちことがあるが、大人になるに従ってこのような態度は改めるべきである	.58	-.09	.61	-.05
7	行儀や育ちの悪い人が、善良な人々と仲良く暮せるとは考えられない	-.03	.35	.29	.15
8	人の一生は生れたときからもはや運命によってきめられている	.09	.22	.15	.38
9	若い人に最も必要なものは、厳しい訓練と強い決断力と家族や国のために動くこととする意欲である	.62	-.12	.50	-.01
10	映画館やバスの中で多くの人と接する機会が多い今日、私達は周囲の人々から病気を感染しないように特に警戒しなければならない	.13	.32	.24	.08
11	人の名誉を傷つけた人に対しては必ず仕返しをしてやるべきである	-.05	.52	.00	.39
12	目上の人に対してはたとえ自分の気に入らないことがあっても我慢して聞くのが礼儀である	.28	.13	.44	.09
13	悪い行いをした人はたとえその人に何事もなかったとしても子孫には必ずその報いがあらわれるものである	.34	.11	.19	.28
14	社会の秩序を守り、混乱を防ぐためには、政府が強い権力を持っていることが必要である	.36	.17	.46	.15
15	すべての人は彼等が何の疑いもなくその決定に従うようなある超自然的な力を完全に信ずべきである	.37	.09	.36	.13
16	他人なんてあてにならないもので、結局頼れるものは自分だけである	-.03	.43	-.08	.47
17	強姦のような性犯罪は懲役や禁固ぐらいの罰では不十分である。もっと厳しく罰すべきである	.39	-.04	.33	.00
18	人々は、はっきりと弱者か強者に分けることができ、結局は世の中は強者が弱者を支配する形で動いている	.00	.41	-.04	.52
19	親に対する感謝と尊敬を感じない人ほど人間として低劣なものはない	.53	-.16	.61	-.14
20	人間は全く無力でいくら立派な理想をかかげたところで、一生かかっても個人の力ではそれほど大したことはできない	.07	.37	-.04	.43
21	伝統的な道徳や生活様式の良いところが急速に失われつつあるので、これを保持するためには力による強制が必要である	.27	.32	.29	.21
22	おそらく易や占いでいつかは多くのことを説明できるようになるだろう	.27	.10	.24	.18
23	今日の社会が最も必要としているのは法律や政策よりも民衆が信頼しうる献身的な勇気ある指導者である	.23	-.13	.19	.03
24	国民の祝日には昔のように家ごとに国旗を立てるといったことは強制してもよいことだ	.44	.10	.45	.03
25	今日の世の中には他人の私的なことに立入ってせんさくする人が非常に多い	.01	.30	.06	.03
26	戦争や世の中のみなくい争いごとは全世界を破壊する地震や洪水のような天災によっていつかはかたづいてしまっだろう	.33	.05	.19	.15
27	どうにかして不道徳な者や邪悪な人間などをこの世から取除くことができるならば、大い社会問題は解決されるに違いない	.18	.18	.41	.02

項 目	因子 (男性)		因子 (女性)	
	1	2	1	2
28 今日のような不安な社会では、法律はもっと厳しいものでなければならない	.41	.19	.36	.20
29 困ったことや心配ごとがあるときは、そのことを考えずにとにかくおもしろいことで気をまぎらすようにするのが一番よい	.12	.19	.11	.24
30 今日の私達の社会では性生活がみだらで全くだらしない人多すぎる	.36	.16	.27	.15
31 もし人々がもっと口数をへらして仕事に精出するならば世の中はもっと住みよくなるだろう	.35	.33	.35	.10
32 世間では教養や学問よりも権力や財力を重んじるものである	-.23	.31	-.07	.28
33 どんな人でもすぐには信頼しない方がよい。へたに信頼するとひどいめにあわされる	-.15	.50	.08	.47
34 正常でしかも善良な人で親や先輩の感情をそこなおうと考える人は一人もいない	.25	-.08	.29	-.08
35 私達の生活は多くの野心家の陰謀によって支配されている。ただそれをたいいての人が知らないだけのことである	-.11	.33	-.06	.43
36 同性愛は性道徳をみだす犯罪であるから厳しく罰すべきである	.32	.12	.49	-.18
37 人はあまり親しくするとあなどられるものである	-.01	.51	.04	.38
38 耐えがたい苦しみを経験しないで大事なことを学びとることは決してできない	.33	.02	.27	.09
39 学生時代には社会や政治の問題には関心をもたずに学問に没頭すべきである	.37	.19	.40	.13
40 文学や恋愛は人間を軟弱にする	.04	.20	.11	.31
因子間相関	.26		.37	